

『日野家雑文書』に見る源氏物語聞書

杉本まゆ子

図書寮文庫蔵『日野家雑文書 室町―宝永』は、その書名の通り、雑多な文書を継いだ卷子である。それを「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」のために撮影したところ、源氏物語の講釈聞書が含まれていたことが確認できた。そのため、帚木、賢木、蛭巻の聞書、合計四紙ほどと少ないが報告することとした。

一、書誌

『日野家雑文書 室町―宝永』（以下、本書とする）は、現在、全丁カラー画像を公開^①しており、書誌の概略はそれによって知ることができるが、記しておく。

書陵部図書寮文庫蔵、函架番号B六・四四五、卷子装一卷、紺紙表紙、題簽「日野家雑文書」、第一紙寸法縦二九・九糎、横四三・三糎。但し、天地に補紙しているので、現在の縦寸法は三二・二糎となっている。墨付一三紙。墨書のみ。紙背文書も見えるが、雲母引きの紙で裏打ちされており、詳細は不明。

一枚目は某年某月十日～十六日までの記録。二枚目は「文明^卯三年二月廿五日写之」とあり。三～五枚目は正保二年八月～延宝二年四月までの火事などの災害や踐祚などの記事の抜書、六～九枚目は宝永七年の宗門手形関連。そして、一〇～一三枚目が源氏物語講釈聞書である。形状は一〇～一二枚目は懷紙折紙で、一三枚目が懷紙を横半分^②に切ったものである。各紙寸法は翻字に記した。

二、来歴

本書は、日野家の献納により昭和七年に図書寮の所蔵となったことが公文書^②により分かっている。献納時の目録を検討すると、日野家の書籍群はそのままの書名で図書寮文庫で保管されているものばかりではない。「古今伝授誓紙写天正七年六月十七日 権中納言公国」一通のように、図書寮に入ってから同様の古今伝受関連資料と纏められ『古今伝授誓紙等』（函架番号二六五・一五五）として登録されたものもある。本書の場合は、そのままの書名は目録に見えず、内容から「正保二年以降年曆等雑々」一巻が本書に相当するの

ではないかと考えられる。雲母引きの裏打ち紙から考えて日野家で一卷になっていたものだが、旧来の書名が実態を伴っていなかったため図書寮で書名変更したものであろう。

三、後陽成天皇勅講源氏物語

聞書のうち一〇紙目に、慶長十二（1607）年十一月十五日の日付が確認でき、日野家の文書であることから慶長九年（十三）年の五年間行われていた後陽成天皇による勅講の聞書であろうと推測された。勅講の様子は『言経卿記』や『お湯殿の上日記』などに記されており、『言経卿記』慶長九年九月二十八日条には⁽⁴⁾

一、後刻ニ参、内了、小御所ニテ花宴一卷御講釈被遊了、聴聞ニ参仕衆、西園寺大納言・花山院大納言・持明院中納言・予・三条三位中将・光広朝臣・実久朝臣・実顕朝臣・秀直朝臣・忠長朝臣・為親朝臣・雅賢・時直・基久・隆致・宗信・宗勝等也、

とあり、日野一門の烏丸光広が講釈を受けていることが確認できる。光広は細川幽斎の高弟で、すでに慶長八年には古今伝受を済ませており、源氏物語の講筈にふさわしい人物と言えよう。なお、聞書の筆跡は乱れており、筆跡で光広と確認するのは困難である。

従来後陽成天皇の勅講は、良恕入道親王御筆（曼殊院蔵⁽⁵⁾）と智仁親王御筆（学習院大学蔵、図書寮文庫蔵）の聞書が知られていた。そして平成二十七年、冷泉家時雨亭叢書から『源氏物語 柏木 河海抄⁽⁶⁾ 卷十五 後陽成天皇源氏物語講釈聞書』が刊行され、冷泉為満の聞書が知られるようになった。小高道

子の解題を参考に各写本と併せてみると、今回翻刻したのは、
十・十一紙…螢巻…慶長十二年十一月十五日
十二紙…賢木巻…慶長十年十一月
十三紙…帚木巻…慶長十三年四月二十八日
となる。新しい巻や日付が登場しなかったことは残念であるが、聞書の記主による差を知り、記主側からしか知ることのできない講釈の様子を知る手がかりになれば幸いである。

【翻刻】

慶長十二 十一月 十五

玉かつら 并三

○螢

いまはかくおもくしき——源の摂政あつ^(破損)「」事也

豎の并也

源卅六の四五月の事也

○一

おもくしき 摂政なればかるくしきありきもならて也

一、人々さまく——

一、たいの姫君 玉内侍也、六条の西のたいに住たる也

一、何事もおほしりたる 玉かつらの事也、十八九の時分也

一、母君 夕良也^上

一、おとゝも 源也

一、人さまのわらゝかに にこやかに也、玉かつらの事也

一、まめたち 好色の事へ、心をやられて也、玉かつら也

一、御らうの程 奉公のらう也

一、さみたれになりぬる 花鳥に

一、すこしけちかき—— 兵部卿より玉への文也

一、との御らんして 源の玉に折ふし居て文をみて也

一、いとゝうたて 玉かつらの事也

「^(破損)さく」長也 ^{ヲサ}舟長、川長、「^(破損)」の斗也、「^(破損)」

「^(破損)」なひ びの字備字也

物など—— 草子の字

玉かつらと螢兵部卿宮と みつゝの事、源のゆかしくおもひ給はんの事也

一、さうしみ 玉内侍の事也

一、此宮 兵部卿の宮也

一、なにかとおもふにはあらず 好色のみちにて返事申すにてはなくて也

一、されたる ひたりさまの事也、源の方へはひかふを螢へ行い本道でない

の心也

一、あいなく あいそもなう也

一、なにくれ なにやかや也

一、御木丁 海河か悪て花鳥の説用

一、さと 颯

一、そひやかにふし こたかく物によりかゝりて程たてい也

一、なく^哥声も—— 螢兵部卿の事也

^{返哥}声はせて—— 玉也、螢によそへて也

一、時鳥などより とゝめぬ、草子の字也、五月雨に物なひせれ時鳥——

一、中宮 秋好中宮也

一、五日 五月五日也、螢の兵部卿かゝと、かは四日の日也」(10、折紙、

三三・一×四八・四糧)

馬場大臣

一、人の心これより 惣別の人の心

一、いけみころしみ 源の兵部卿を

一、色は躰、つやは用也、

一、宮より御文あり 兵部卿より玉への文也

一、みる程こそおかしかりけれ 面白き詞也、文の書様也

けふさへや

^{返哥}顕て—— ねの音とよみて、よき也、あやめの根にかけて也

一、くすたま この五色糸かけて悪鬼をのそくと也、へいれいのわさわいを

のかるゝ也

一、御ゆかひ びとにこる悪也

一、中將のけふの—— 夕霧也、中將を花散里の養子と也

一、此方^{こなた} 花散里の方へ也

一、宮人

一、左 ひたんとよむ也

一、たいの御方 紫の方と注したる本ある悪き也、玉かつらの西のたいの事

也

一、さうふかさね 面をあをくうらを紅にそめたるを云也、

〔^(破損)〕なてしこの若葉の色したるから衣^{キヌ} 〔^(破損)〕あかくうらあをし

〔^(破損)〕「わらいて」

〔^(破損)〕「のあやめ 五月五日の

一、南町^上 紫の町也

一、打毬^{ダキウラク} 玉をころはかいて馬にのり

一、かちまけのこむさう らんしやう也

一、あかれ給ぬ 分参⁽¹¹⁾、折紙、三三・二一×四九・〇糶

珍しう 東宮事なり、女になしてみ奉はやと也

一、御かほうちまもるは 東宮の藤つほを御らんする也

一、式部かやうにや 年よりたる女あまのやうにと也

一、よいのさう—— 禁中にしう申さうの事也

一、雲林院をうりんともよむ

一、からくは 花さうなり

一、き、さしたる 紫の心也

一、あさちふ—— しつ心なき

一、風ふけは—— かゝるさゝかには、紫の上を我身に比へたる也、たとへ

てよみ給へり、色かはる心末の詞をみて

一、中将君に 権斎院の女房也

一、かけまくは 秋おもほゆるとは、かならずいつとなけれども也、むかし

おほゆる心也、

あさかほたてまつり給なとせし事あれば、秋に縁あるよし也、今は斎院にて

かひなき故なり

むかしをいまに」

〔^(破損)〕いにしへのしつのをたまきを かへされん物のやうに引哥とりかへ

す物にも、心は斎院にたち給はぬさきはさりとと頼給し事也、

〔^(二モト)御重訂〕一、あいなき事は 草子のひはん也

一、人ひとり 紫の上の事也

一、しはふるい人 しはふるい人はかほにしはよりたると也

一、世中いかゝあらんは 当代になりて源しの時にあひ給ぬ事をおもへるな

り

一、あいなき心の けんしのしるく見給ふなり

一、つと也、集のいふなも又

一、いらせ—— 中宮^春へ春宮のおはします事也

一、にしきくらう 引哥^{みる人もなくて散ぬる紅}とる にしきの心にての給へる

一、中宮のこよひまかて給 源しことは也

一、東宮をは今のみこ すすく院の御ことは也、朱雀の御子と〔^(破損)〕せ給へと御

遺書^言あるらしとなり」(12、折紙、三三・九×四五・一糶)

一、人々 御ともの人々也

一、あるしもさかなもとむ—— ふうぞく催馬楽のやうなる物也

一、中の品 品定の所にすりやうと書たる首尾をふ也

一、おもひあかれるけしきに聞かねてをかれ也、むすめ 空蟬也

一、き、と、め—— 耳立て源のきかれたる也

一、衣の音なひ 夏の衣はするくとすましきと云人あり

わらは

夏の衣定まりて すゝしはかまにてする いてもなしいた引もまする也

一、ゑわらひ ゑみ、わらふ也

一、むつかりて なくはかりにてましいやかると也

一、やをら そろくより給て也

一、さうしのかみより 上と云説あり、昏也

一、ちかきもや 清涼殿などもや作つねのやねとかはりもや作ちかふ也^由

一、うちさ、めき 耳言万^{サ、メク}

一、よすかさたまり 葵上をちきたる事也

一、さうくしかめり

一、おほすことの御心 藤つほに源の心をかよはされたと也^{(か)モトよ重訂}

一、人のいひもらさんと 藤つほ○の時など、き、つけたらん時はなんとせうと云心也

一、式部卿宮の姫君 あさかほの巻にあれ共、此巻にはしめていひ出すもの^{桃園式部卿宮也}

まへにあさかほをりす あらふと云たる也

一、ほほゆかめて かたくるしき也」(13、切紙、一七・九×五三・七)

注

(1) <http://toshoryokunaicho.go.jp/kotenseki/Detail/37713>

(2) 宮内公文書館蔵「図書録」昭和七年、識別番号 乙二九八一

(3) 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、平成十三年)

(4) 『言経卿記』は『言経卿記』一三(大日本古記録、岩波書店、昭和六十二年)によった。

(5) 島崎健「後陽成天皇講「源氏物語聞書」」(『国語国文』四七卷一号、昭和五十三年)に詳しい。なお、曼殊院蔵本に関しては、今回は大蔵精神文化研究所付属図書館蔵昭和六年影写本にて調査を行った。

(6) 小高道子「智仁親王の源氏物語研究」(『中古文学』六三号、平成十一年)が詳細に論じている。

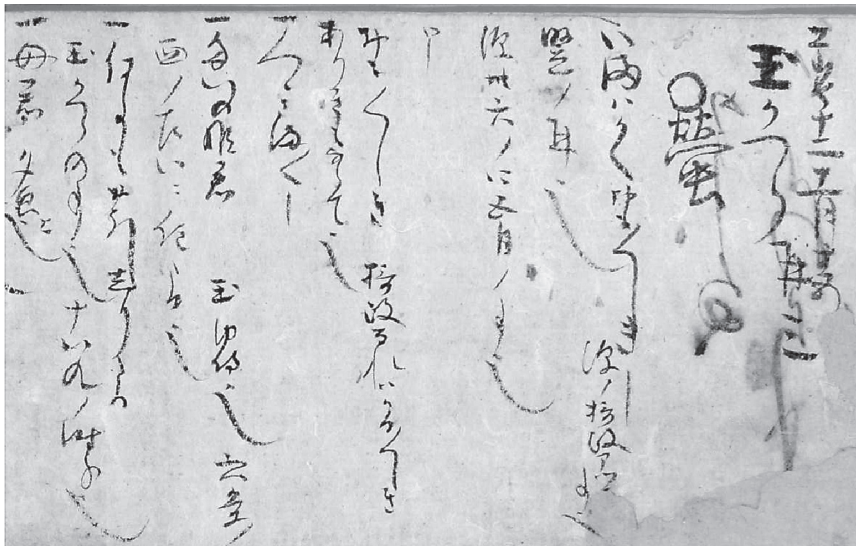
(7) 小高道子解説『源氏物語柏木 河海抄卷十五 後陽成天皇源氏物語講釈聞書』

(冷泉家時雨亭叢書、朝日新聞社、平成二十七年)

(付記)

稿者は平成八年に、パネル討論で「共有化をめざして―国文研データから暦日型への統合・平安中期一〇〇年間の例に―」と題して論じた経験がある(『人文科学とコンピュータ』シンポジウム)。東京大学史料編纂所の大日本史料総合データベースの公開前で、今となつては

稚拙なものでしかない。ネットワークの普及した現在ならば、本書のような雑文書に隠れている文学資料・画像情報を暦日データに結びつけて共有していく試みが可能であると考え。当部の「書陵部所蔵目録・画像公開システム」が一助になればと願っている。



聞書冒頭部分